

モロヘイヤ (ハウス雨よけ・露地栽培)

シナノキ科：中近東

栽培暦

月	3			4			5			6			7			8			9			10			11		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業																											

■栽培のポイント

1. 日当たりと排水が良く、肥沃な場所で栽培する。
2. 発芽適温及び生育適温が高いため、早播きは禁物。
3. 軟らかい枝を順次折り取って収穫する。

■所要種子量 a 当り 1.5 g (1 g = 約 350 粒)。

本県では気象的な面から自家採種は難しい。毎年購入するのがよい。

■育苗 発芽適温が 25～28℃ と高いため、早い作型ではハウス内で電熱育苗とするが、4 月下旬以降播種の遅い作型ではハウスまたはトンネルで保温育苗するのが望ましい。

温床 電熱線は 3.3 m² 当り 200W を配置し、早めに温度を確認しておく。周囲を木枠組みとし、トンネルは天井をビニールの 2 枚合わせにする。

用土 排水良好で肥沃なものを選ぶ (pH 6.0～6.5、EC 0.4～0.6 d s / m)。10.5cm 鉢につめ、播種までに発芽適温を確保しておく。

播種 1 鉢当り 2 粒播き。覆土の厚さは約 5 mm。

管理 発芽後は徐々に換気を行うほか、早めにずらしを行って健苗育成に努める。また、本葉 2 枚時頃までに間引いて 1 本立ちとする。

育苗に日数は約 35 日。本葉 4～5 枚時に定植する。

■定植準備 耕土が深く、肥沃で排水や日当たりが良い場所を選び、定植の 10 日前までに施肥をすませておく。

ベッド うね幅 170～180 cm (床幅 90 cm、通路 80～90 cm) のうね立てを行う。早い作型ではポリマチル (緑) を張って地温を確保するのが良い。

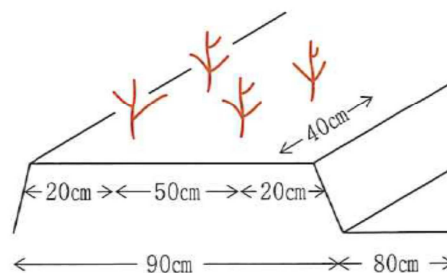
施肥例

(a 当り)

うねつくり

(千鳥植)

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	500 kg	—kg	成分量
苦土石灰	10	—	窒素 2.8 kg
苦土重焼燐	4	—	燐酸 1.8
MMB14 号	8	—	加里 2.4
燐硝安加里 S604	—	10	



■定植 地温 17℃以上となつてから株間 40 cm の 2 条千鳥植える。a 当り所要株数は 270 株。根鉢を崩さないようていねいに植える。

■定植後の管理 無整枝では草丈 2m ほどになるが、収量低下や倒伏を招くため、一般には収穫を兼ねた摘心を何度も行う。

整枝・誘引 本葉 6~7 枚上で主枝を摘心し、側枝を伸ばす。以後、孫枝・ひ孫枝の順に軟らかい部分で折り取る（収穫を兼ねる）。強風の恐れがある場合には、支柱やネットに誘引すると良い。

追肥 主枝の摘心を始めた頃から、生育を見ながら 15~20 日置きに燐硝安加里 S604 を a 当り 1.5~2 kg/回追肥する。マルチ栽培では、かん水チューブを利用して、液肥 2 号を（200 g/回）施してもよい。

病虫害防除 ハダニ類、アブラムシ類、コガネムシに注意する。

■収穫 軟らかい枝を、葉を付けたまま折り取って収穫する。開花期が過ぎるとしだいに枝が硬くなり、やがて収穫終期を迎える。収量は 40 kg/a。

ちよつと一服

モロヘイヤの和名は、「たいわんつなそ」。シナノキ科の一年生草本。ビタミンとミネラルに富むため、エジプトの滋養野菜として一時期ブームとなったが、今では各地の自家菜園に見られるなどすっかり定着。

我が国では戦前から導入されていたが、1979 年に商社がエジプトから種子を導入してブームの火つけ役になった。山形県では 1980 年に鶴岡市で初作され、その後、各地で栽培されている。